謎をひもとく
長崎出島から世界へ渡った銅
―越中哲也氏が語る―

輸出銅は「御用銅」と呼ばれた。

― 輸出銅の掛け渡し ―『唐蘭館絵巻 蘭館図 倉前図』 川原慶賀（江戸時代の出島出入の絵師）筆　長崎歴史文化博物館所蔵

世界一の銅輸出国

ここに一枚の絵がある。

日本の役人と西洋人の前で銅が計量され、次々と箱につめられている。これは江戸時代の銅輸出の様子である。その賑わいが聞こえてきそうなほど、やりとりは活気に満ちている。

鎖国時代、日本唯一の国際貿易都市として栄えたのが長崎である。海に浮かぶ扇形の出島をはじめとして、さまざまな国の品物が行き交った。なかでも銅は、一七世紀後半以降、それまでの銀に代わって、輸出品の中心となっていた。最盛期には年間約三千～五千四百トン（五百万～九百万斤）の銅が輸出され、一六九七年には、日本の産銅は約六千トン（一千万斤）と世界一を記録した。輸出された銅はアジア各地で取引され、日本の銅は世界に影響を与えていたと言えるだろう。

その銅は、出島を拠点として、どのようにして輸出が行われていたのだろうか。長崎歴史文化協会理事長の越中哲也氏にお話をうかがった。越中先生は地元のテレビやラジオでも広く活躍し、講演・著書も多数手がける、長崎の歴史・文化研究の第一人者である。

「長崎には「銅座」という地名が残っていますが、この場所は銅を鋳造するための銅吹所が設置されたことからこの名が付きました。なんらかの銅の加工を行っていたと考えられます。その後、輸出用銅は全て大阪で精錬された銅に限定されたため、大阪の棹銅（さおどう）が長崎に運ばれ、輸出されるようになりました」

「棹銅」とは細長い銅のインゴットのことで、その形状から呼ばれた名である。

越中　哲也　氏

輸出銅がなぜ大阪で精錬されたものに限定されるようになったのだろうか。住友金属工業（株）、住友商事（株）の要職を勤めた後、長崎の歴史研究に携わる山脇滋氏にうかがった。

「当時の冶金技術は未熟だったため銅鉱石中に含まれる銀を抜き出すことができず、銀を含んだまま銅は輸出されてしまっていました。そこで、住友政友の姉婿、蘇我理右衛門（そがりえもん）は南蛮人に原理を聞き、苦心の末、銅から銀や不純物を取り除く精錬法「南蛮吹き」を開発しました。技術は大阪の同業者に伝授されたため、大阪は銅精錬の中心地となりました。そして、銀の国外流出を防ぎたかった幕府は、南蛮吹きで処理した棹銅を輸出銅に指定するようになったのです」

大阪の住友の出店（でみせ）（屋号：泉屋）は画期的な精錬技術によって銅の取扱量を増やしていき、一六八〇年頃には、長崎にも出店を設けた。その出店の跡地が長崎の浦五島町（現五島町）にあると聞き、今回、長崎歴史文化協会の方々の案内によって、その地を訪ねてみた。

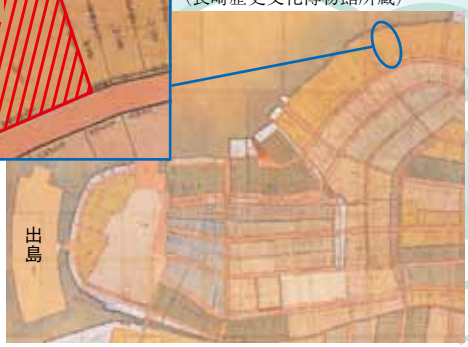
山脇　滋　氏

謎に包まれた長崎商人の活躍

かつては海に面したという長崎出店の跡地は、現在はビルの建ち並ぶ一角となっている。敷地の周囲を歩いてみたところ、その面積は予想以上に広く、銅蔵や銅掛場（帳場）などを備えたかなりの規模のものであったと考えられる。大阪から船で運ばれた棹銅は出店の銅蔵にいったん収められ、手続きを経て出島から輸出されたようだ。

「住友の出店は幕末に撤退するまでの二百年間に

周辺は幕府の藩邸で、その中でも特に広かったのが住友の出店



長崎惣町絵図
○印は住友の出店があったところ
（長崎歴史文化博物館所蔵）

南蛮吹きの技法を説明している『鼓銅図録』（左）と昭和58年に映画製作のために再現された南蛮吹き（右）

輸出用棹銅
長さ25cm、直径2cm、重さ300g

長さ60cm～1mのものも。

わたって、長崎の地で銅の輸出に深く関わりました。しかしその資料はほとんど残っていません。役人に関する資料は多くあるのですが、町人は公の文書には記録されないためです。また、不思議なことに住友が用いた屋号「泉屋」が資料にはありません。正確には一店あるのですが、住友との関係性は薄いようです。なぜ大阪で用いた屋号が長崎ではないのか、謎だらけと言っていいでしょう」

長崎の町人文化については不明な点が多いと越中先生は話す。

長崎は商人によって繁栄した街である。幕府は重要な貿易拠点である長崎を直轄領である「天領」とした。天領には殿様がおらず、少人数の奉行や代官によるゆるやかな支配下のなか、大商人から小商人までその資力に応じて貿易に参加することができた。それによって、近隣の私領とは比較にならないほど長崎は大いに繁栄したのである。なんと今でいうボーナスもあったというから驚きだ。「かしょ銀」、「かまど銀」といって、長崎会所に集まった貿易の利益から幕府への運上金や役人らの給与が差し引かれ、残りの一部が町人に配られた。身分制度の厳しい封建社会ではめずらしい制度である。

異国文化をうまく取り入れながら、商売へと結び付けていった長崎の商人。年中行事に費やすエネルギーも大きく、秋の大祭「長崎くんち」は江戸時代から豪華絢爛な祭礼として盛んであった。坂本龍馬はじめ、得体の知れない脱藩浪士たちの声に、最初に耳を傾けたのも長崎の商人だった。しかし残念ながら、多くは名前も所在もわかっていない。今日知られているのは後世の人間が地道に調べ上げた結果、足跡が浮かび上がった人物だけだという。

一体どんな魅力的な人物が銅の貿易に携わったのだろうか。商才に長け、人生を楽しみ、街を繁栄させた長崎の商人。冒頭の銅貿易の絵をみると、活気あるその声が今にも聞こえてきそうである。

一部復元された出島跡
出島は明治以降に埋め立てが進み、海に浮かぶ扇形の出島は原形が失われ、市街地に埋もれてしまったが、最近ではこの復元が進められている。

銅座跡と現在もその名が残る銅座町